

品性・品格は覆い隠せない…

昔は心の事を「うら」と言った。

表面に出ている顔などを「面」(おもて)というのに対して、隠れている内面は「うら」とか「下」(した)という言葉で表した。ただ「うら」の方は隠すわけではなく、表面に現れない心のことで、「下」の方は表面に現わすまいとして、こらえ、隠している心を指すという違いはありました。恋心は、心の中で恋しく思うこと。まだ恋を意識し始めた頃の、あまり淡い想いです。同じ様だが、「下恋」(したこい)という言葉もありません。これはきつと誰にも知られたくない想いでしょう。それにしても心の裏をかく人や、下心のある人が増えて、「うら」「も」「した」も、印象の良い言葉ではなくなりました。(山下景子著『美人の日本語』より)。

昔から日本人は「うら」を大事にしてきました。着物などにしても、表もさることながら、裏に贅を尽くしたものでした。隠してもチラチラと見えてくる裏の美しさが人々の心を楽しませ、床しさを感ぜさせたというものです。特に人の心の美しさというものは隠そうとしても、おのずから表に滲み出てくるものなの

ではないでしょうか？皆がそういう「うら」の心を磨き、その美しさが床しく滲(にじ)み出して周りを潤していくならば、世の中はもっと明るく楽しいものになっていくこと間違いありません。ところが今、表は華やかだが裏はゴツゴツ。或いは裏も表から丸見えの薄っぺら。「うら」のゆかしさを大切に合わせてもいない様な人が多くなってきた様に思えてなりません。ではどうやってその「うら」を磨いていけばいいのでしょうか。日蓮聖人は『一生成仏抄』に曰く、「ただ南無妙法蓮華經と唱えたまつる是(心)をみがくとはいうなり」と…手を合わせ一心に仏様を拜む、引いては親を拜む様になるという、基本的な事こそが、心を磨くことであると仰っておられます。

その様に基本がきちんと確立されていないと、周囲の環境に振り回されて苦しむ結果を招いてしまう。葛飾北斎(かつしかほくさい)は1つの絵を描くのに、あらゆる方向から眺めたといわれています。(視力が弱かった事も影響しているのか?)何事でもそつだろつが、迷ったら原点に戻る。続けるうちに少しずつ分かってくるものです。物事の本当のところは言葉では説明できません。結局、肩書きや財力がいくらあっても、肝心の部分が抜けていたら何もならないということでしょう。

有名な仏教説話に『白樂天和尚の真やりとり』がある…白樂天に仏教の真

意を問われた道林和尚は「諸悪莫作衆善奉行 自淨其意、是諸仏教」(悪いことをするな、善いことをせよ。そして心を浄くせよ。それが諸仏の教えである)と答えます。あまりに平凡な解答に白居易が「そんなことは、3歳の童子でも知っていますよ」と投げ掛けると、道林和尚は「3歳の子供が知っているも、80歳の老人でもこれを実行する事は難しい」と応じるのです。口で言うだけでそれを実行に移せなかつたらダメです。

また感動するというのは、やはり世俗的なものを取り払った時なのではないでしょうか。何か心に不純なものがあると、自然とそれが外に出てくるものです。お釈迦様の悟りにしても修業体験の結果であつて言葉ではない。言葉はあくまでも方便で、最終的なところは口では説けないとおっしゃっている。「40・50は鼻垂れ小僧、男盛りは8、90」…この言葉は、物事を最後まで探求していく姿勢をいっただけです。我々の品性・品格は覆い隠せません。私がよく言う『本物人間』とは、「言っている事と、やっている事が一致している人間の事です」。お釈迦様の様に全て一致している方は稀な存在です。私のような凡人が到底至り得るものではありませんが、『言と行』とを一致させようと努力する事であれば、私にも出来るし誰にでも出来ます。日頃どんな考えを持ち、何をしているかは、

その人の品性や品格、また人相にも表れる。どんなに高い地位や肩書きを振りかざしても、高価な衣装で装つても、人の品性まで覆い隠すことは出来ません。常の行いが滲み出る品格は、隠すことの出来ないものです。真の人格者は肩書きや衣装で装わなくても品格が感じられる。地位や肩書きを誇示せず、軽装で身を包んでいてさえも分かります。言葉と顔というのは隠せない履歴書なんです。新年度を迎えた4月の春先に、人としての基本線を見直しましょう。

合掌

副住職 谷川 寛敬

